

再会

ピットくん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、青年は祖父の墓参りに行つた。

山奥の墓地で彼を待ち受けていたのは、一人の少女と数多の妖怪変化たちだつた…。

彼はそこで妖怪たちに導かれ、祖父と運命的な再会を果たす…。恋愛SF小説です。

第一章
第二章
第三章
第四章

目次

| | | |
|------|----|------|
| 第一話 | 出立 | その1 |
| 第二話 | 出立 | その2 |
| 第三話 | 出立 | その3 |
| 第六話 | 到着 | その2 |
| 第五話 | 到着 | その1 |
| 第四話 | 到着 | その1 |
| 第七話 | 少女 | その1 |
| 第八話 | 少女 | その2 |
| 第九話 | 少女 | その3 |
| 第十話 | 少女 | その4 |
| 第十一話 | 嵐 | その1 |
| 第十二話 | 嵐 | その2 |
| 第十三話 | 嵐 | その3 |
| 第十四話 | 嵐 | その4 |
| 第十五話 | 嵐 | その5 |
| 第十六話 | 嵐 | その6 |
| 第十七話 | 嵐 | その7 |
| 第十八話 | 嵐 | その8 |
| 第十九話 | 嵐 | その9 |
| 第二十話 | 嵐 | その10 |

| | | | |
|-------|----|-----|---|
| 第二十一話 | 嵐 | その1 | 1 |
| 第二十二話 | 嵐 | その1 | 2 |
| 第二十三話 | 嵐 | その1 | 3 |
| 二十四話 | 嵐 | その1 | 4 |
| 二十五話 | 嵐 | その1 | 5 |
| 二十六話 | 嵐 | その1 | 6 |
| 二十七話 | 嵐 | その1 | 7 |
| 二十八話 | 再会 | その1 | |
| 二十九話 | 再会 | その2 | |
| 三十話 | 再会 | その3 | |
| 三十一話 | 再会 | その4 | |
| 三十二話 | 再会 | その5 | |

63 61 59 57 55 53 51 49 47 45 43 41

第五章

第一章

第一話 出立 その1

二十四歳の頃の彼は、不自然で頭でっかちのように見えた社会に、嫌気がさして一步距離を置くことにしてから、五年が経過して、少し焦っていた。浪人生時代に出会った「教養」という言葉に感化され、愚かにも、一般大学生が謳歌するような生活を遠ざけ、一家に引きこもり、古今東西の知識を吸收することを一番とした時から、何かが間違っていたのではないか？ 大学一年生の頃の彼が憧れたのは、コナン・ドイルの小説にててくるあの探偵のようになることであり、一限の授業が終わつた後、二限の授業があるにもかかわらず、大学の図書館に行つて、自らの興味が赴くままに無選別に本を選び、そのまま夕方が訪れるまで、読書に没頭するというのが彼の日課であつた。もちろん、そうすることによつて、前期の単位を大幅に落とし、その結果、徐々に授業から足が遠のいていくことは明白であつた。高額な授業料を親に負担してもらつていた彼にとって、両親の期待を裏切るような行為は心苦しくもあつたが、しかし、心の中では、自分が正しいことをやつているという確信があつたので、モラトリアムの許す限り本の世界に没頭していた。

1

確かに、思考の喜びを貪り食うことは、彼に十分な満足感を与えるしたものの、現実的な変化は何ひとつ起きていたなかつた。結局のところ、彼は「いつまでも現実逃避をしていてはいけない」という答えを、自分の頭で結論付けているのにもかかわらず、大人の世界から目を背け続けていたのである。

五年前は、哲学書や社会学の思想書を読むだけで自らが高邁なオーラを纏つた氣がしていたが、翌朝目覚めると、昨日は確かにそこについたはずのオーラはなくなり、ただ精神が高揚しているときの全

能感にすぎないと気づかされるのであつた。それは、酒を飲んだ後に、アルコールが体内から排出されると、同時に幸福感も体内から排出されてしまうのと同じである。結局、己の弱さを痛感することになつた彼は、汗と脂の臭いが混ざり合つた枕をそつと自分の懷に引き寄せて、寂しく敗北感に浸ることしかできなかつた。

2

そんな彼だつたが、今日は祖父の墓参りに行く予定があつた。十六歳のときに祖父が死んで、彼は人生で初めて死というものに直面することになり、今まで永遠に寿命が続いていくのではないかと錯覚していた彼であつたが、時間というものはどうしようもなく有限であると、祖父の死をもつて彼は体感した。当時は、将来に無限の希望を抱いていた彼も、十年という月日が経ち、多くの人がそうであるように、常識という言葉の名のもとに純粹無垢な気持ちを心の押し入れの奥深くに押し込み、よもや、人生の終わりになつて、それを探求するエネルギーが残つていなことを後悔することになる準備を、彼は抜かりなく整えていた。

——次へつづく——

第二話 出立 その2

彼にとつて、社会はまだ生まれたばかりの幼虫のように未熟に見え、これからどのように変化していくのか皆目見当がつかなかつたために、変化を好まない彼は、どんな職に就くべきなのか決心出来ずになつた。その頃には、少しではあるが執筆活動の真似事をしてみたりもしていたが、だれの目から見てもその作品は陳腐で、あまり期待はできないのかもしかないと考えている時期であつた。そのため、彼には結婚願望というものが存在せず、普段よく耳にする少子高齢化という陰気臭い単語も相まって、人類という生命体は自分たちの時代で絶滅するのではないかと本気で考えていた。

正直なところ、最初のうち、彼は墓参りを断ろうと思つていた。もちろん、祖父に対しても偉大な敬意を持つていたが、時間の変化といふものは残酷で、当時の彼は重度のゲーム依存症になつており、周りの人たちからどんな助言をされようとも、固く心の扉を閉ざし、彼にとって救いになるはずの言葉を見事に門前払いしていた。そのために、父から誘われた今回の話しに対しても、即座に否と返した。そもそも、墓参りというものの自体がひどく非効率なものであるし、そんなことをするくらいなら、家に引きこもつてゲームをしている方がましだと思った。しかし、父からの強い説得があり、長子として彼には次期の墓守りの役割があつたために、最終的にはしぶしぶ了承することになつた。なにより前職を体調不良でやめた彼にとつて、時間の余裕はあまりにもあつたのである。

次の日からというもの、日に一度は、墓参りに一族を代表して行かなければならぬことに反感を覚えはしたが、いちど承認したものその後日に蔑ろにすることは、さすがに先祖に申し訳ない気持ちになつたし、なにより、彼の小さな自尊心に傷がつくような気がしたので、これ以上余計な事を思いめぐらすのをやめ、徐々に気持ちを前向きにしていくように努めた。

そうして嫌々ながらも指折りしているうちに、あつという間に当日の朝を迎える、そのころには彼なりに心の準備が整つていた。彼は、父

から堅苦しい恰好をする必要はないと言っていたので、特に背広を着たりするようなことはせず、春の陽気に合わせた黒ズボンと白シャツといった、フォーマルな格好で墓参りに向かうことにした。その上には、黒いジャケットを羽織り、いつかの機会に父から譲り受けた、安物の黒数珠を腕にはめて実家を後にした。

まず車に乗り込んだ彼は、ブルートゥースを起動して携帯と同期させ、車内スピーカーから好きなお笑い芸人のラジオを見逃し配信で聴き始めた。

——次へつづく——

第三話 出立 その3

自宅がある千葉から、墓参りに行く寺がある茨城までは圏央道で行くことに決めていたので、高速の入り口付近まで車を走らせ、そこでもう一度するため車を停車させた。まだ、走り始めてから三十分ほどしか経っていないが、何度もこここの高速に乗ったことがあったので、目的地の出口までは五十キロ以上休憩ができないということを知っていた。これは、日常的に運転をしない彼にとつてあまり歓迎できることであり、また、単純に煙草が吸いたいという理由もあった。おそらく、後者の方が大半の理由を占めていただろう。

車を停めたコンビニの駐車場で煙草に火をつけた。煙を肺に吸い込んで少しどどまらせ、ふうっと、息を吐くと、副流煙とともに白い煙が、もくもくと空へ上がっていく。晴れた空に何食わぬ顔で浮かんでいる雲と煙が、同色で重なっていくと、だんだん境目がわからなくなつていった。それを見ていると、現在の生命ある自分が、死という永遠の称号を手に入れた祖父よりも不明瞭なものに見えてくる。祖父には雲のように遠くから見ている分には明瞭な輪郭が与えられ、彼の方は副流煙のように、人類にとつてはなんら利益がなく、軽く息を吹きかけられただけで、その存在が今にも霧散してしまいそうな儚いものに思えた。

これ以上余計なことを考えていても、気分が沈んでいくだけだと思つた彼は、煙草を携帯用灰皿に捨て、車に乗り込んで目的地を目指した。

高速を降りる頃には、あたりの人家は姿を消し、周囲は田園風景が広がる田舎道に様変わりした。たまにぽつんと現れる農家以外は、人工的なものが一切なく、車窓を開けてみると、都会とは違う純度の高い空気が体の底まで吹き抜けた。彼には、田舎から都会に訪れた人が、都會で空気を吸うと、あまりの空気の汚さに気分が悪くなり、ここで住んでいる人々の健康は大丈夫なのだろうかと心配になつてしまい理由が納得できた気がした。住宅の皆無な田舎に来ると、彼はある解放感に関するイメージが想起された。それは、都會で彼の全身

に付着するストレスや周りからの期待感などが、風呂で垢を洗い流す
ように落ちていくというものである。その感触は、新鮮に感じられ、
原始的なものへと回帰したいという彼の無意識の欲求を搔き立てた。
ナビの音声案内が、目的地付近に到着しましたルートガイドを終了
します、と言った。ナビ上では目的地のピンに、車のとんがりマーク
が徐々に近づいていることを示していた。申し訳程度に現れた、寂れ
た商店街を抜けると目の前に立派な寺が現れた。

——次へつづく——

第二章

第四話 到着 その1

実際のところは、全景の上半分しか彼には観察することができず、寺は四方を高さ三メートルほどある焦げ茶の木材の塀で囲まれていた。寺の裏手には広大な森が、丘のように広がっていて、それは天国まで続く、自然が作り出した巨大な階段のように彼には思われた。

寺の前の、道路を挟んで向かい側に駐車スペースがあり、彼は車を停めて外へ出た。長時間のなれない運転のせいで、彼の精神は少し興奮しており、ポケットから煙草を取り出して、気持ちを落ち着かせることにした。

もくもくと白い煙が空へ上がっていく様を見ていると、寺の後方に広がる山のてっぺん辺りから、何者かがこちらを見ているような感覚にとらわれた。彼が気になつてそちらを向いてみると、たしかに米粒のような影が浮遊してはいたが、それが人間であるかは判然としなかつた。

「よし、彼が寺に来だぞ。お前たち嵐を起こす用意をしておけ。彼を派手に歓迎してやるんだ」そう言つて、上空から彼を見下ろしている天狗の姿がそこにはあつた。

その声に呼応して「うん」「てめえ、間違えたらただじゃおかねえぞ」と、一対の風神・雷神がはるか上空から天狗に返事をした。彼らはこの地方の天気を担当するようになつてから、まだ数百年という新米だつたが、最近は安定して嵐を起こすことができるようになつていたので、天狗の力を借りることは少なくなつてきていた。彼らは雲の上で座禅を組み、嵐を起こすべく精神を深く集中させた――

もうこれ以上の暇つぶしを彼は持ち合わせていなかつたので、住職に渡す菓子折りを持つて立派な門を潜つた。

敷地内に足を踏み入れると、右前方に貫禄のある本堂が彼を出迎え

た。隣には二階建てのごくありふれた一戸建てがあり、渡り廊下で本堂と住宅とを行き来できるようになっていた。

「やあ、いらっしゃい。遠くから大変でしたね」と中から、袈裟を着た初老の痩せた住職が声をかけてきた。

彼は適当に相槌を打つて、軽く世間話をし、住職に祖父の墓参りに来たことを伝えた。住職に祖父の名前を尋ねられたので、彼は祖父の名前を伝えた。少し待つてください、と住職は言い、住宅の方の扉を開けた。どうやら、住宅の一階部分の半分は和室になつており、そこは仕事部屋になつているようだつた。壁一面を書類が覆いつくしており、たくさんの資料がきれいに並べられていた。

そうやつて、何とはなしに住職の後ろ姿を眺めていると、さらに奥の住居へとつながる襖が開いて、五、六歳くらいの幼い男の子の顔がこちらを凝視していた。

——次へつづく——

第五話 到着 その2

ダメでしょ開けちや、と奥にいた女の子に言われ、すぐに扉は閉められた。どうやら、さらに奥の部屋はリビングになつていて、そこで男の子と女の子がテレビゲームをしているようだつた。

そして、彼にとつて一番印象的だつたのは、男の子の頭が平均よりだいぶ大きいことだつた。彼は小学校時代から、頭が小さいことにコンプレックスを持つつていて、世間的にはいいことであると言われがちであるが、彼には脳の総量が少ないと遠まわしに言われているような気がして、素直に喜ぶことができなかつた。そのため、彼には昔から相手の目を見たあと、頭の大きさを確認する癖がついていたのである。しかし、あくまで平均より大きいという程度だつたし、もしかしたら女の子の頭が小さすぎて、遠近法で大きく見えただけかもしれないといと、彼は自分に言い聞かせた。一瞬の出来事であつたが、二人の顔の印象は彼の瞼の裏にはつきりと焼き付いており、男の子の方は平凡な特徴のない顔をしていたのに對して、女の子の方は際立つて整った造形をしていた。

ほどなくして、住職がひとつつのファイルを抱えて戻つてきた。
「すみません、うちの娘が」と住職は言つた。どうやら、女の子の方が寺の子ではないかといつう彼の推測は当たつていたようだ。

「いえいえ、全然大丈夫ですよ」と彼は無意識に上から目線で答えた。「月曜から、コロナの影響で小学校が休校期間に入つてしまつたので、近所の友達と日が暮れるまで、憑りつかれたようにテレビゲームをしているんですよ」と、住職は自分の娘の話しになつた途端、明らかに上機嫌になつて、聞いてもないことをべらべらと饒舌にしゃべり始めた。

彼には、子供たちが、パチンコ依存症の人のように、生氣のない虚ろな顔をして、テレビゲームをしていることには全く興味がなかつたので、さつさと祖父の墓に案内してもらうことにした。

こちらがお祖父さんのお墓です、と住職が指し示した先には、灰色の光沢がある、比較的きれいな墓と、鏽びれたような色をしている小

さい墓が二つ並んでいた。

彼はこの場所に来るのが初めてというわけではないが、未だに墓の正確な位置を覚えることができなかつた。山の斜面の、すぐ下にあるということは理解できていたが、この寺に到着した時点で、彼の精神は、人々の思いの重さを全身に感じて、人をおんぶしているときのように、膝には負荷がかかり、足取りが重くなつて、彼は急にその土地に関する感覚がくるつてしまふのだった。

彼のこの種の感受性が一般の人より大幅に強く、異常であることに気づいたのは、彼が成人するよりもはるかに後のことだつた。

3

——次へつづく——

第六話 到着 その3

それまでの彼には、どうしてほかの人たちが、一日の終わりになつても、精神を消耗するどころか、むしろ元気に振る舞つているのを、傍から見ていて不思議に思わずにはいられなかつた。彼にとつて周囲の人が立てる物音は、彼の精神にひどいダメージを与え、彼の思考は直ちに中断されてしまうのだつた。彼にとつては、そのことが幼少期の頃からの悩みの種で、誰もいない所では、人並みに思考することができるのでだが、ひとたび、人前に出ると直ちにそれらが空中に霧散していき、昨日まで積み重ねてきたものも台無しになつてしまふのだ。彼は五歳の時、そのことで、保育園に行く必要なんかないという結論を下したが、周りの大人们は呆れた顔をして、聞く耳を全く持たなかつた。彼にとつては切実な問題なのに、いくら訴えても、保育園まで引きずられてこの問題はなかつたことにされてしまうのだつた。また、当時の彼にはそれほどの勇気や行動力がなかつたのも原因だつたのかもしれない。結局、そのうち彼は考へるということを止め、世間に順応することを選んだ。それは、彼にとつては、先の見えない絶望に思えたが、実際に、あまり深くものを考えず、友達と外で走り回ることは、意外にも彼に多くの幸福を与えた。そして、彼が高校三年生の、倫理の授業でパスカルに出会い、そこから哲学にどっぷり嵌つて、考へるということを考え始めるまでの十数年間、彼は正真正銘の白痴であつた。

4

この状況に相応しくない思考の糸を辿つていた彼だつたが、ふと我に返ると、祖父の墓に手を合わせた。

祖父が亡くなつたばかりの頃は、部屋で一人でいるときに、天井から祖父が、彼のことを優しく見守つているのではないかという考えに憑りつかれることがよくあつた。祖父に見守られていると思うと、彼は自分がしていることがあまりにも月並みで、祖父に誇れるようなこ

とを何ひとつ成し遂げていないことを不甲斐なく思っていた。だが、そんな考えも祖父の死から時間が経つにつれ、だんだんと薄れていった。その結果、彼には人生をどう組み立てていくのかという思考に至ることもなくなり、目先の欲望を満たすためだけに行動する、彼の姿がそこにはあった。

しかし、祖父の墓に手を合わせることで、再びあの頃の不甲斐なさが蘇ってきて、彼の心をつよく締めつけた。

祖父の死は、すべての人間に平等に訪れる生命の終わりという命題を、彼に与え、普段なら存在すら世間から隔離されている、人間の死というものを彼に明確に提示した。

——次へつづく——

第三章

第七話 少女 その1

もうずいぶん長い間、祖父に思いをはせていたのだろう、彼が合わせていた手を崩し、再び住職の顔を見ると、住職の表情は、この状況に相応しい、一切の感情を表に出さない無の表情をしていた。おそらく、彼が頭の中で生前の祖父に再会していた間、ずっとその表情を維持していたことは想像に難くなかった。

住職に礼を言つて別れた彼は、他の連れがいたならそのまま車に直行して、家路についていたであろうが、今日の彼は、単独行動なので、墓参りという責務から解放されると、寺の裏手に広がる山林の様子を見てみたい欲求に駆られた。

彼が、敷地の左奥から、山へと続く登り階段を上がっていくと、より一層自然が深くなり、普段の日常生活で耳にする物音は大地に吸収され、無数の葉で構成された森のカーテンが、人間の住む領域とは、また違うより原始的な空間が彼を出迎えた。

石段を最後まで登りきった彼が、後ろを振り向くと、草木の生い茂った森が背景を完全に遮り、寺の姿を視認することはできなくなつていた。

森の中は、人がひとりやつと通れるくらいの獣道があるきりで、そこを辿つていくと、不意に視界が開け、巨大な湖が目の前にあらわれた。彼の、左前方では、ひとりの少女がイーゼル板を湖の方に向けて、パレットを片手に何かを描いていた。彼女の足元には体の大きい、年老いた黒猫が寄り添つていて、いち早く彼の気配に気づくと、近くの木に登つて彼から姿を隠した。

彼は、もう少し近くで彼女の絵が見たいと思い、徐々に彼女の背後に迫つていった。その間も、彼女は、彼の接近に気づく素振りすら見せず、一心不乱に作品と向かい合つていた。

彼が、彼女の絵を見てひとつ判明したことは、彼女が印象派の絵を描いているということだった。まるで、ルイ・ルロワに「印象を描い

ただけの未完成な絵」だと言われてしまい、そういう雰囲気を持つたその作品は、絵の具を混ぜずにそのままカンヴァスに置いていく筆触分割の効果を最大限に發揮して、印象派ならではの発色を存分に強調していた。

「それは、何を描いているの」と彼は、あまりにもわかりきっていることをわざと訊ねた。

「見ればわかるでしょ」と、さすがに彼の存在に気づいた彼女は、一刻もこのやりとりを終わらせたいという感情を前面に押し出して、ぶつきらぼうに返事をした。

彼は興味を示してもらうために、はやくも核心をつく質問をすることにした。それは、彼が印象派について知っているということを彼女に知らしめることであった。

——次へつづく——

第八話 少女 その2

「印象派ですよね。ぼくも印象派の絵は結構好きで、あなたの睡蓮の絵は、モネへの尊敬の念を込めて描いているんですか」

その画家の名前を聞いた途端、彼女の筆の動きは止まり、彼の方に、視線は向けていないものの、明らかに興味を示して耳を傾けている様子がうかがえた。彼は、彼女の気を引けたことを確認すると、慎重につぎのように会話を続けた。

「個人的にはルノワールの、ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会、とかは好きな作品のひとつですね。人によつてどんな作品が良いかというのは差があると思うんだけど、ぼくは自然的な絵画というよりも、人間がより多く描写されている、民衆的な絵画の方が好感が持てるんだよね」と、彼はしたたかに己の嗜好を開示した。

彼女は、ついに彼と視線を交わし、普段周りの人とは話すことのできない専門的な会話のできる者が現れたことに歓迎の意を表明した。「わたしは、自然的な絵画の方が好きかな。あまり人が大勢いるところが得意ではないし」

この返答というのは、彼にはある程度想像がついていたもので、それは彼女が、今まさに描いている絵が自然画だつたということが理由であった。それに、彼は民衆的な絵画が好きと言つたが、実際には、それと同じくらい自然的な絵画も好きだったので、彼女がどちらを選んでも、彼には反感の念が沸き上がる余地はなかつたのである。

「美術館によく行つたりする？」と彼は尋ねた。

「どうだろう、年に二、三回くらいじゃないかな。といつても、ここからだと、行くだけでも相当な時間とお金がかかるんだけどね」そう言つた彼女は少し微笑んだ。

「具体的には、どんな画家が好きなの」と彼は聞いた。

「一番はじめに好きになつたのは、モネかなあ。初めて行つた美術館の常設展で、観た睡蓮の連作のうちのひとつだつたんだけど、わたしあまりにも衝撃を受けちゃつて、売店に行つて、睡蓮を買ってきて、自室の壁に掛けたつくり、そのまま一週間くらい、絵の前に立ち尽くす

勢いで、その絵の虜になってしまったことがあるの」

「それは、興味深い話しだ」

「わたしは、趣味程度だけど、絵を描くのはすごい好きだったから、その出会いがあつてから、いつもこの湖の前に陣取つて、モネの真似事をするようになつたの。そのうち、湖の底から、睡蓮が浮かび上がつてくるんじやないかと思つて」

彼女がそう言うと、湖の底から空気泡が、数秒後には自らの命が力尽きるとも知らずに、ぶくぶくと水面へ浮き上がつてきた。二人が驚いて、顔を見合わせていると、本物の睡蓮が、次々と水面に姿を現し、彼らは、口を開けたまま、その場でただ立ち尽くすしかなかつた。

——次へつづく——

第九話 少女 その3

睡蓮の中心付近は、鮮やかな朱色に染まつていて、外へ向かうにつけだんだんと色彩はその効力を失つていき、一番外側の花弁に至つては、一度手を触れてしまつたら、即座に崩れ落ちてしまいそうなほど儂い、純白をしていた。それらは、彼女の近くから、湖のより遠くへとだんだん拡がつていき、最終的には、その広大な湖全てを紅蓮の主張で埋め尽くした。

一瞬何が起こつたのか、彼らには理解できなかつたが、目の前の湖が、紅蓮に染まつてゐる以上、何らかの法則が作用したものであると考えるしかあるまい。森の中は、靈力が満ちていて、人ならざる者たちの力が影響を及ぼしてゐるのだ。

心なしか、曇天がこの湖に向けて集まつてきてゐるように彼らには思われた。もしかしたら、この森には、何か不思議な力を集める役割をしているのではないかと思われた。

そうして、彼らが集まつてくる雲を眺めていると、気がついた時は、湖の睡蓮は、全て姿を消してゐた。

彼らは啞然とした。自分たちが、つい今しがたも網膜に焼き付けた光景は、一体どこへ消えてしまつたのだろうか。もしかして、全ての花たちは、何らかの理由によつて、自らの浮力を喪失して、湖の底へ沈んで行つてしまつたのだろうか。それとも、直前に起きた出来事は、実際には現実に起きていなくて、彼らの瞳に映る虚像が、何らかの障害を受けて、脳に信号が伝播しきる前に何者かの介入があつたのかもしれなかつた。

そのとき、湖の対角線上で巨大な鯉が、華麗な跳躍とともに、派手な水しぶきを上げ、全身を水面にたたきつけて小気味のいい音を湖畔に響かせた。それは、彼らの気を引きはしたが、ほんの一瞬のことで、また元の興味に意識が向かつていつた。

結局のところ、彼らにその答えを解明する手立てがないということだけは明白であつた。彼にしてみても、彼女にしてみても、ほんの少しでいいから、お互の表情の中に、この心の喪失感を埋め合わせら

れるような手がかりを探し求めていた。しかし、それはいくら要求したところで、彼らのほかに解を持っているものと言えば、周りを取り囲む、口の堅い大自然たちだけであつた。それらは、人の気配がするときには決して相互に語り合うことはなく、その知らせは人間が森の入り口に足を踏み入れた瞬間から、またたく間に森全体に知れ渡るようになっている。そこで彼らは、人語で話すを中止して、我ら人間がその場を立ち去る時まで、まるで、わたしたちは人語とは無縁の存在であるというのを、主張するかのように、毅然とした態度で、そして徹底的に無関心に沈黙しているのである。

——次へつづく——

第十話 少女 その4

結局、彼らは例外に選ばれることはなく、他の人類と同じように無関心な姿勢を、とことん貫かれた。先ほどまでの、状況を代わりに説明することのできる、唯一の証人に裏切られてしまつたため、心の喪失感が満たされることはなかつた。その代わりにと言つては何だが、二人の間には、秘密を共有したことによる結束感のようなものが、芽生え始めていた。それは、UFOを目撃した幼い兄弟が、アフロの母親にそのことを信用されなくとも、互いに宇宙飛行士になるのと似ている。彼には、この事実がことさら嬉しく思われた。なぜなら、この秘密を知つているのは世界中で自分たちだけであると確信していたからである。

二人は、広大な湖を眺めて、未練がましく無言で立ち尽くしていた。お互にとつて、いま最も重要なことは、どうやら会話を継続させることではなくて、自らの喪失感の原因を解明することの方に重心が傾いていたようであつた。

そのとき、不意に彼の丹田の部分から、すなわち胃の部分から、食料要求の号令がなされた。彼は、彼女に今のお腹の音がばれてしまつたのではないかと、気まずい表情になつて目線は足元をさまよつた。しかし、彼女の顔は湖の方を向いたままで、一切彼の変化には気づいていないようであつた。それがわかると、彼の精神は打つて変わつて余裕を取り戻し、金持ちの富豪のように、手を後ろで組み、上半身を後方にそらしてむしろ尊大な態度を取り始めた。

「そろそろ、お昼だね」と、彼女は何かを察したようにつぶやいた。それは、魂がゆらうらと空想世界を漂うのをあきらめ、現実世界の彼女の抜け殻になつていた、御神体に再び憑依したことであらわしていた。そして、空想世界にいた彼女の魂が、彼の奏でた音色聞き逃していなかつたことが明らかになつた。

その事実は、彼に先ほどまでの気まずさを再燃させ、顔が次第に熱を帯びてきた。

「そうだね、ぼくはもう帰ることにするよ。だんだんとお腹が空いて

きたところだし」そう言つて彼は名残惜しくも、その場を後にすることにした。

「ちよつと、待つて」と、彼女は言いながら、もう完成間近のイーゼル板を指さした。

「あと、五分で描き終えるから、そこで待つてくれない。あとで、近所の美味しい定食屋を案内するから。もう少し、あなたの絵画についての話を聞かせてほしいの。わたし、普段絵画についての意見を交わせる友達がひとりもいないから、こういう人が、次にいつ現れるのかわからないし、もしかしたら、この先、一生自分の中で、絵画に対する考え方が腐臭を発しながら腐っていくのかと想像するだけで、身の毛もよだつような思いがするの。もちろん、あなたがどうしても大事な用があるというのなら、わたしには止める権利はないわけだけど」「わかった。特に用事もないし、ここで待つてるよ」

「よかつた。そしたら、しばしのお待ちを。超特急で片付けちゃうから」そう言つて、彼女は、宣言通り残りの余白部分を、一度も筆を止めることなく描き上げた。

——次へつづく——

第四章

第十一話 嵐 その1

その間、彼の方に目配せをすることはなく、彼も、途中でそのことに気がついて、ポケットから煙草を取り出し、火をつけて一息ついた。体内に吸い込んだ煙が、何らかの工程を経て、彼の空腹感を吸収し始める。それは、腹痛を正露丸で無理やり解消しようとする試みと、同じような過ちなのかもしれないが、彼にとつては、このやり方こそ、二十歳の頃から慣れ親しんだ方法であり、これ以外の方法を彼は知らなかつた。

口の中から、吐いた煙がもくもくと空へ旅立っていく姿を彼がぼんやり眺めていると、木の上で、寝そべりながらこちらを見つめている黒猫と目が合つた。その黒猫は遠目から見ても、はつきりわかるくらい太つており、くたびれた顔の印象から、相当年老いた猫であるといふことが、彼の観察から導き出された。数秒のあいだ、ひとりと一匹は視線を交えていたが、一匹の方は、すぐに彼に対しての興味を失つたようで、大きなあくびをして、ふたたび顔を突つ伏して昼寝を再開してしまつた。一瞬、彼はその猫に侮辱されたような気持になりかけたが、相手はただの猫であるということで、少し大目に見てやることにした。ただ、たかが猫といえども、年老いた猫となると、その瞳には、人間を含んだ全ての高齢の動物がそうであるように、悟りの境地が垣間見え、彼らの前では、どんなに巧みに隠し立てをしようとしても、瞬く間に、見破られてしまう気持になるのだつた。

彼は、ほんのわずかな時間でも、猫相手に見透かされたような気分に陥れられたことが悔しくなり、仕返しに、猫の寝ている気をゆらゆらとゆらし、少しでも安眠の邪魔をしようとした。

そうして猫が、愚かな男を見下ろしている間に、青みがかっていた空は、どこからともなく現れた分厚い雲の大群に覆い隠されてしまつた。

先ほどまで明るかつた湖周辺は、瞬く間に明度のつまみが絞られて

暗くなり、彼女がちょうど絵を描き終えた頃に、空から、天下の雨雲軍の無数の歩兵隊が、容赦なく彼らに降り注いだ。軍の攻勢はすさまじく、あつという間に雨脚は強くなり、風が吹き荒れてだんだんと嵐のようになつていった。

「洗濯物をしまわないと。あなたもいつたん家で雨宿りした方がいいわね。わたしについてきて」そう言つた彼女は、イーゼル板で雨を防ぎながら寺のある階段の方へ向かつていった。彼もそのあとに続いた。

5

二人が、本堂まで駆け足で戻ると、妹が一生懸命に背伸びをしながら、大慌てで洗濯物を取り込んでいる最中だった。

——次へつづく——

第十一話 嵐 その2

「ちよつと、まー君も洗濯物しまうの手伝つてよ」そう叫んだ妹の大声は、遠くからでも彼らにはつきりと聞こえた。どうやら、ついさっきまで、妹と一緒にテレビゲームをしていた男の子の名前はまー君というらしい。しかし、開け放たれたリビングから丸見えの男の子は、自分が呼ぶ声には全く反応せず、ひたすらテレビゲームに没頭していた。残念なことに、彼の肉体はテレビの前に実在してはいたのだが、精神は、ある時点からその場を離れ、ゲーム空間の中に幽閉されてしまっていたのである。

もし仮に、彼が、連續して四時間以上、ゲームを継続している状態から、われわれの住んでいる現実世界に、彼以外の人間が、連れ戻そうと試みるならば、もれなく失敗に終わることは明らかである。なぜなら、彼の立場におかれたことのある人間なら共感できることであるが、たとえ、彼の知能がいかに優れていようとも、四時間を超えた段階で、前頭葉の働きは大幅に低下し、精神年齢はいやいや期の子供にまで低下する仕組みになっている。このタイミングで、彼の母親が、ご飯てきたわよ、と夕飯に呼ばうものなら、彼の全身は怒りにおおわれ、奇声を発しながら自室の壁をどんどん全力で殴りつけることだろう。この時の彼は、怒りの獣であり、周りの人の声は、彼の心には届かない。同様の問題は、スマホ依存症やネット依存症によつても引き起こされるのであり、このような人は日々、世の中に増え続けている。そういう人たちが増えた結果、生じることといえば、子供にキラキラとした名前をつけてみたり、会社の上司に向かつて、横柄な口の利き方をする若者が増えたり、常識はずれの発言を簡単にSNSで発信したりするような国民性が誕生するのである。

「亜里、ありがとうね。あとの洗濯物はお姉ちゃんが取り込んでおくから、亜里は、すでに家の中にある洗濯物たちをハンガーに掛けてから、室内用の物干しに掛けておいてくれるかしら」

「承知いたしやした。明子殿」

「あなたは一体何時代に生まれた妹なのよ。そのしゃべり方が一般的

だつたのは、あなたの前々世くらいの話しどう

「へーい」そう妹が、適当に相槌を打つと、そそくさと家の中へと退散していった。

彼は、少女の後ろ姿を目で追いかけ、遠い昔の日の自分を、無意識に小さな背中に重ね合わせていた。すると突然、幼い頃の思い出が、次元の裂け目のよう、彼の眼前に現れ、彼の意識を過去の次元へと強く誘つていった。

6

——次へつづく——

第十二話 嵐 その3

若き日の彼は、非常に気難しい少年で、しかしながら、色々な問題が発生したために、その気難しさは、すぐに封印されることになつてしまつのである。

当時の彼は、保育園という制度を全く受け入れることができず、頑なに登園拒否をし続けていた。とうとう、信頼していた大人たちから、この子には社会性がないかも知れないという、話しをしているのを、偶然耳にしてしまひ、一晩悩んだ末に、彼は、芽生え始めたエゴイストとしての才能を育んでくれていた、読書という行為を完全に捨て去る決心をした。元来、マルチタスクをするということが一切できない彼にとつて、唯一伸ばすべきであると考えていた、知性を捨てるということは、彼にとつて死と同義ではあつたが、それでも彼は、個性より社会性の方を選び、社会の立派な歯車の一員となるべく、自分の主張は決して口に出さず、全部相手の意見を取り入れるという、諂媚者としての日々を始める準備を少しづつ整えていた。しかし、そんな馬鹿げた選択肢を、そこまで思考能力のある者が選ぶわけないだろうと、人は言うかもしれない。だが、そこには彼にとつて、唯一の長所になりうる個性を、捨ててまで、手に入れたいものが存在していたのである。それは、母親の元気が、日に日になくなつていくということであり、彼はこの重大な問題を解決すべく、日々試行錯誤を繰り返していた。ちょうど、その頃の彼の家庭というのは、一般的な家庭の事情とは、少し異なる悩みの種を抱えていた。それは、ただの労働者のひとりであつた父が、前の会社を辞め、新たに、雇用者としての第一歩を歩み始めたところから端を発していた。

独立した会社が、初期の頃に必ず通らなければならない道のひとつに、安定した仕事の供給がなされないという困難がある。父の会社も、その例に漏れず、事務所の屋根では、閑古鳥が自らの使命を果たすために、きれいな声で鳴いていた。当時は、従業員に支払う給料すら稼ぐことができず、会社は赤字続きで、両親は周りの親族たちに、数百万の借金をしていた。日に日に、借金の額が増えていくのと比例し

て、彼の母親の顔からは、徐々に生気が失われていった。彼が、そのことに気づいたのは、桜のきれいな町に、引っ越してきた、三歳くらいのこと、彼は毎日保育園から帰つてくると、その日読んだ本の話を、好んで母親に聞かせていたのだが、母は、彼の話に相槌を打つてはいるものの、目線は宙に向いて、定まることはなく、頬はやせ細り、目は虚ろであつた。それは、彼の人生に訪れた最初の困難であり、今でも彼の心の底にトラウマとして残つている。繊細な心の持ち主であつた彼にとつては、相当つらい日々であり、そのくせ、母は、父がパチンコから帰つてくると、自分の心労を見せまいと、気丈に振る舞つたので、父はなかなか、母の変化に気づかなかつた。彼には、母のその健気な姿が、余計に辛く感じられた。

——次へづづく——

第十四話 嵐 その4

一方、父はこの危機的状況においても、泰然とした態度を保つていて、仕事がうまく取れずに、平日に不名誉な休みができてしまつたときにも、顔色ひとつ変えずに、パチンコ屋か競馬へ意氣揚々と出かけ行つた。ある不名誉な休みの日、彼が父に「お父さん、今日はお仕事行かなくていいの」と尋ねると、父は「今は、ちょうど我慢の時期だからね。物事には不可視の流れというものがあつて、それを感覚半分、論理半分で感じることが重要なんだ。その風をなるべく高い正確性を持つて理解できるようになることが、中小企業の経営者には、必要な資質であり、将来的には、松下幸之助が言つていたように、蛇口を調節するだけで、仕事量がある程度自由に決定することができるようになる、ダム式経営というものを目標に、日々営業しているんだ。まあ、こんな話しをしたところで、お前には理解できないだろうが、お前には父さん流の帝王学というものを、今のうちに教授しておこうと思う」

「ていおうがく？」

「そうだ。まあ、帝王学という言葉の意味については、まだ知らなくていい。ただ、お前は父さんの血を引いているから、いずれ、自分で会社を經營していきたいと思い立つ日が、来ないとも限らないから、でくる範囲で、一子相伝していきたいね。話しを元の戻すと、今はただ、種をまくことしかできない時期だからね。たしかに、目の前の畑には、遠くまで収穫できるものがないように見えるかもしれないけど、土の中には、これから五年か、十年くらいしたら、家族を十分に満たしてくれるだけの作物の種が埋まっている状態なんだ。来月は、今月よりもある大企業からのお仕事がまた増えるから、状況は少しずつ上向きになりつつあるから、お前は心配しなくても大丈夫だよ」そう言つた父の言葉を、彼はほとんど理解することができなかつたが、父の飄々とした雰囲気から、そんなに心配する必要はないのであろうと安心することができた。

そんな父とは対照的に、母の精神状態はかなりの極限にまで追い詰

められていた。眞面目で愛情深い母は、父が、いくら将来的には会社は安定していくに違いないと、諭されようとも、目の前の借金が、毎月増大していくという現実に、大きなストレスを受け、次第に情緒が不安定になつていった。

彼は、少しでも母のことを元気づけようと、思いつく限りの行動を、実践してみるとこととした。しかし、どんなに彼が、愛情を持つて何か母のために骨折ったところで、表面的に笑顔を見せてくれるだけで、母の心には、何ひとつ訴えかけることができなかつた。

—— 次へつづく ——

第十五話 嵐 その5

そうした期間に、彼は己がどこまでも無力な存在であるということに幼いながらも自覚してしまい、何もすることができない自分を激しく責め立てた。今思い返してみれば、ただ彼は、母の愛情を欲していただけだつたのかもしれない。だが、その願いが十分に叶えられることはなく、彼はこれから先の生涯においても、常に愛情の欲求不満を抱えて生きていくことが決定づけられてしまった。

母を思う、子の行動は次第にエスカレートしていき、彼は母に元気になつてもらいたいために、より過激な犠牲を払うようになつた。しかししながら、彼の愛情は、一向に満たされることはなく、それでいて、母の顔はだんだんとやつれていつた。そうして、最終的には自分のエゴを捨てて、可愛い子犬のように無抵抗に、彼が保育園に通うようになれば、母の状態は少しでも上向きになるのではないかという考えにたどり着いた。後に、計画は慎重に実行されることとなり、彼は自らの個性をどぶに投げ捨て、自分の考えを大人たちに主張するということをさっぱり放棄した。すると、すぐに効果は表れ、以前ならば、彼が玄関前で延々と、保育園に行くといふことが、いかに個性の成長にとって非効率的であるかを演説していたが、それを止めたとたんに、いつもは無表情で「いつてらっしゃい」と言つていた母が、初めて、心なしか笑顔で彼を送り出すようになった。その時、彼の母親にとつて一番重要であつたことは、愛すべき息子が保育園で、他の子どもたちと能天気に過ごすことであつて、少年革命家のように、集団行動を拒否することではなかつたのである。母の笑顔には、多分に愛情がこもつており、母の愛情に飢えていた彼は、その愛情で全身を包み込まれて恍惚となつた。不意に、子の瞳には涙があふれており、今まで我慢していた感情が一気に心の内からあふれ出してきた。彼は、玄関に立ち尽くしたまま大粒の涙を流し、突然泣き出した我が子を前に、母は少なからず動搖を隠せなかつた。しかし、母はすぐに事態を察し、我が子を強く抱きしめた。それは、ほとんど数分の出来事であつたが、人間というものは、日常的な出来事ではなく、数年に一度到来す

る非日常的な出来事によつて大きく成長するもので、彼はそのほんの数分間に、人として大きく成長した。彼の心のノートには「考えるということを考えない」という言葉が印字され、以来、彼は白痴となつたが、個性より母を選んだことについては、全く後悔していなかつた。なぜなら、彼には母の方が大切に思えたから。

7

——次へつづく——

第十六話 嵐 その6

彼が、慌てて玄関の方から、家の中に入ると、ゲームをしていたはずのまー君と呼ばれていた男の子の姿は、いつの間にか、テレビの前から消えていた。代わりに、洗濯物を取り込んでいた縁側の方から、「まー君さすがだね」という妹の声が彼の耳に届いた。どうやら、彼が昔のことについてを馳せていた刹那に、まー君は妹の手伝いに行つてあげたようだった。その瞬間でないと、まー君はこの建物の構造的に、洗濯物を取り込んでいる部屋にはたどり着くことができない計算になる。もし、彼が壁をすり抜けることができるというのなら話しは別だが。そんなふうに、彼の妄想癖が制御不能になり始めたので、彼は意識的に思考を止め、二人の子供たちの手伝いをしてやるために隣の部屋へと行つた。彼の不確かな記憶によると、布団が干されていたらはずなので、子供一人には、さぞかし骨が折れるだろうと思っていたが、部屋をのぞくとそこには彼が想像していた状況とは異なる光景が広がつていた。

家族四人分の布団と洗濯物は、すでに和室を埋め尽くすように、きれいに室内干しが完了されていて、妹とまー君は腰に手を当てて、胸を張りながら彼のことを迎え入れた。

「これ、二人だけで干したの。結構な量があつたと思うんだけど」

「いや、わたしはほとんど何もやつてないの。まー君が大体干してくれたからね。こう見えてまー君は意外とパワーがあるんだから」と、妹は彼得意気に返事した。まー君の方はというと、ずっとぼーっとした表情をしていたが、最後には彼にこりと笑顔を見せてくれた。そして、まー君は、急に後ろを振り向いて、家の右奥へと続く廊下の方へ全速力で駆けていった。彼には、突然まー君の頭がおかしくなつてしまつたのかと心配したが、まだ物心ついていないような年頃の男の子なので、別にそこまで危惧する事態ではないと、彼は自分に言い聞かせた。

「あれは、まー君が家に帰る合図なの。そうしてなのかは知らないけど、まー君は十二時ちょうどになると、トイレに一度行って、そのまま

まわたしに何も言わずに家に帰ってしまうの。最初のうちはびっくりしちやつたけれど、本人にいくら言つても、勝手に帰つちやうからもう諦めることにしたの。ちなみに、朝は八時ちょうどに家のチャイムを鳴らしに来るわ。休日だろうとお構いなしに、八時に遊びに来かる、わたしどしてはもう少し寝かして欲しいなつて思うこともあるけれど、まー君は空気を読んでるだけで、人の言うことなんか、一切聞かないんだから。あれはもう病的ですらあるわね』と、妹が彼のために、丁寧に今の状況を説明した。

次へつづく

第十七話 嵐 その7

そうして いる間に、「雨が強くなってきた」と言いながら、彼女がかごいっぱいに入った洗濯物を抱えて家の中に避難してきた。

「まー君、帰ったよ」と妹が言うと、「もう、十二時か」と彼女は何の引っ掛けりもなくつぶやいた。どうやら、まー君の存在は時報と同等に扱われていることが、今の発言から推測された。

「そしたら、この洗濯物だけ干すから、あなたは妹とリビングで待つて。五分で終わらせるから」と彼女は言つた。

彼と妹はリビングに戻り、妹はテレビゲームを一緒にやらないかと誘つてきた。彼はその大役を快く引き受けた。程よく彼女の相手をしてやつた。

彼にとつて、ゲームとは、四歳の頃から二十年間付き合ってきた人生の相棒のような存在であり、彼らの世代の人々にとつては、常に有力なコミュニケーションツールの一つであつた。ゲーム好きというだけで、ほとんど交際のなかつた同級生と仲良くなることが可能であり、彼もその恩恵を大いに享受した数多のゲーム好きのひとりであつた。しかし、ゲームには現実逃避という要素が多分に含まれており、あまりにもゲームにのめり込みすぎると、それぞれの年齢において、適切な社会経験を積むことができず、最低限度のストレス耐性を獲得できないまま人格形成していき、社会になつた途端に突如として空から降りかかる多くのストレスに耐え切れず、社会からドロップアウトしてしまう人が、彼の同世代には多数存在した。それは、怪しい宗教団体で隔離されて育ってきた青年が、社会に勤めに出ると、社会経験が乏しいせいで全く常識がなく、周りには奇行に見えるようなことを平然とやってのけるのと同じである。

だが、あと十年後には、時代の方が彼らに追いついてくるのかもしれない。なぜなら、十年後には彼らが世の中の中心になる年齢だし、科学の進歩というものは、僕らの想像をはるかに上回る速度で進んでいくのが時代の常であるから。それというのは、十年前の人類にとって、ガラパゴス携帯の方が一般的であつた時代があり、ステイーブ・

ジョブズの発表があるまでは、スマートフォンが時代の主役の座を奪つていくなんて誰も予想することができなかつたのと同じことである。

二人の対戦が一段落したところで、ちょうど彼女がリビングに帰ってきた。

「お待たせ。そしたら、定食屋に行こうか」

妹は、彼にまだゲームの相手をしてほしいという表情をしていたが、決して強く引き止めたりすることはなかつた。もしかすると、そういう態度の裏側には、自分の姉を盗られてしまつたという嫉妬と、女性としての生来の勘の良さから由来している、二人の仲を邪魔してはいけないという妹なりの優しさがあつたのかも知れない。

——次へつづく——

第十八話 嵐 その8

彼は傘を借りて、彼女とともに戸外へとくりだした。雨はいよいよ本降りになろうとしているところで、この絶妙に弱々しい雨音はもつとも人間の心を癒すことができ、そんな雨降りの時、彼は猛烈に本が読みたい気分になるのだつた。しかし、状況的にそれは不可能なので、彼は雨の音色に耳を澄ますことで自らを満足させることしかできなかつた。

彼らは並んで歩き始めたが、初対面の男女の多くがそうであるように、二人の歩く速度は一瞬でばらばらになり、彼女の方が常に彼を置き去りにしていた。そのすれ違いは、彼女の歩く速度がとんでもなく速かつたことが原因ではなく、彼の歩く速度が極端に遅いために発生しており、彼は周囲の自然豊かな風景に完全に心を奪われていて、彼女が不機嫌になり始めていることに全く気づく気配がなかつた。彼女の方も、彼がこちらにはほとんど目もくれていなことを心得ると、あきらめたようため息をついて彼に歩幅を合わせてやつた。

歩き始めてから十分も経たないうちに、うえだ食堂と書かれた看板が彼らの目の前に現れた。扉には営業中の札がしてあり、駐車場には一台の車が停めてあつた。彼女が「ここだよ」と扉を指さすと、店内へと入つていつた。どうやら、ここが彼女の言つていた食堂であるらしい。

彼が、彼女について中へ入つていくと、陽気なおばさんが「いらっしゃいませ」と彼に声をかけた。店内はL字型にテーブルが配置されており、四人掛けのテーブルが五ヵ所あり、全ての客席が埋まつたとしても、二十人を収容するのが限界というどこにでもありそうな定食だつた。L字の長い方の奥の席では、ひとりのおじさんが熱心に新聞とにらみ合いをしていた。完全に店の空氣と一体化しているその人物は、いくら新聞で全身が確認できないにしても、その新聞越しに伝わつてくる穏やかな雰囲気から地元の人でうかがえた。

彼女は目の前の、一番入口に近い席に座つていたので、彼はその向いの席に腰を下ろした。彼らの頭上では、まあまあの音量でテレビが

垂れ流しにされていたが、それは今流行りの旅番組のようで、映像が見えずにタレントのリアクションだけ聞いていると、彼らがどこにいて、何をみているのか全くわからなかつた。「これは、すごい」といくら芸能人が言つたところで、具体的に何がすごいのか彼には何ひとつ伝わつてこないのであつた。

そうやつて彼が、思考の中で、同じ景色のところをぐるぐる走り回る愚行を繰り返していると、ふと、奥で新聞を読んでいたおじさんと目が合つた。その地元のおじさんは彼と視線が交差してから、彼と一緒にいる彼女の存在に気づくと、目を見開いて、これは驚いたという表情をした。そして、みるとうちに顔の口角を吊り上がらせ、好奇心を込めた表情で「明ちゃんが男連れているなんて珍しいじゃないか」と彼女に向けて言つた。

「いや、そんなんじゃないから」と、彼女は新聞親父の方を向いて冷酷に言い放ち、それから顔全体に力を込めて、鬼の形相で新聞親父をにらみつけた。

第十九話 嵐 その9

厨房の方から、おばさんがお冷を二人分持ってきて彼らのテーブルに置いた。そして、徐に「ほらほら、若い人には若い人のペースがあるんだから、そつとしておいてあげましょ」と、保護者を装うとしながらも下品な笑みを浮かべて言つた。

「この人たちの言うことは、全部無視していいから」と彼女はつんけんしながら彼に忠告した。

「それで、注文はどうしますか」とおばさんが尋ねると、「わたしは天そばで」と彼女が即答したので、「ぼくも同じやつもらつていいですか」と彼は言つた。郷に入つては郷に従えで、こういう田舎の定食屋では、当たり外れのメニューが混交している可能性が高いと思われたので、地元の人がよく頼むものなら大きく外れることはないだろうと彼は踏んだのであつた。

「さつきの話しの続きだけど」と彼女は前置きし、「わたしが愛国主義者であることがもしかしたら強く影響しているかもしれないんだけど、十九世紀にフランスで花開いた印象派の絵というのは、ほとんどが日本の浮世絵の影響を少なからず受けっていて、わたしが印象派を愛好している根本の考え方みたいなものがあるんじやないかと最近はよく思うのよね」

「まあ、たしかにモネが葛飾北斎の浮世絵に強い衝撃を受けて、人物画から自然画へと移行していくたという話しさ有名だからね。ただ、モネはもともと若い頃から静物画を描いていたみたいだから、あくまで浮世絵は一要素であつて、全要素ではないんだろうね」

「そうね」

「当時は、ジャポニスムが流行つていたという時代だつたから、きみの質問に答えるとするならば、その愛国主義という言葉はあんまりよくなじんじやないかとぼくは思うな。そういう場合には、もつと控えめな日本愛くらいの表現で事足りると思う。日本愛なら、ぼくたち日本人は全員持つっていて、十分に共感することができるができるからね」

「日本愛なんて言葉は思いつかなかつたな。確かに、なかなか面白い表現化もしねりないわね」

「そうだろう。それに、モネは晩年に睡蓮の絵を描くために、シヴエルニーに日本庭園を参考にした庭を造つたくらいだからね。きみの言うところの愛国主義は十分に満たされることだろう」

「いや、日本愛に便乗させてもらおうわ」

「そうかい」

「そういうえば、これは言うかどうかすぐ迷つたんだけど、うちの寺の敷地内にある、昔使われていた母屋に、絵画の収集が趣味だった先代が集めた絵がたくさん保管されているんだけど、よかつたらあなたに紹介したいなと思ったんだけど」

彼は、彼女のこの言葉を聞いた瞬間、どうしてもその収蔵品を見てみたいという強い衝動に駆られた。普段の彼は、怠惰で何事もマイペースに行動するタイプだが、一度彼のやる気スイッチを押したが最後、物事を達成するまで、異常なまでの行動力を發揮して、その好奇心を満たそうとする、彼の隠された側面がみるみるうちに彼の内奥から姿を現し、思考を支配した。しかし、彼も未熟なりに社会経験を積んできたひとりのにんげんとして、目の前に出された魅力的な選択肢を無分別に享受するということが、多くの場合得策でないということくらい、理解できるようになつていていたので、軽く関心を示すだけにとどめておいた。

「いくら今は人が住んでいない家と言つたところで、昨日まで顔も知らなかつたような男を、急に家に連れて行つたりして、ご先祖様たちは驚いたりしないかな」

「どうだろう。わたしが許可を出している時点で、そういう心配をする必要はないと思うけど。それに、うちはよそのご先祖様がうじゅうじやいるようなところだから、あまりそういうことを考えても仕方がないと思う」

「そうかもしねりないね。じゃあ、お邪魔させてもらおうかな」

「うん」

——次へづぐ——

第二十話 嵐 その10

ちょうど二人の会話が一段落したところで、天そばが彼らの元に運ばれてきた。そばの上に君臨している天ぷらの堂々とした姿を見ると、彼の興味はすぐさまそれに釘付けになつた。衣の量が少なめで、厚さがほとんどなく、外見だけでみると一流の天ぷらそのものであつたが、彼はここが田舎の定食屋であるということを鑑みて、味にまで期待をするということをやめにしておいた。もし仮に、目の前にある天ぷらが、舌の肥えている彼を満足させるような出来であつたとするならば、休日のお昼時にこんなに客が少ないということは考えにくく。なぜならば、偶然にもこの定食屋にたどり着くことができた幸運な美食家によつて、日本中の同志に向けた、彼の主観にもとづく軽薄なグルメ情報が拡散されていなければならぬと思われたからである。

しかし、万が一という可能性もなくはないので、天ぷらが汁を吸収し始める前に、箸ですくいとりその真価を確かめることにした。「これは、すごい」と彼は小声でつぶやき、相手をあまりにも過小評価していたことを素直に認めざるをえなかつた。彼女は、彼の反応を見て、口元を手で隠しながらクスクスと笑つていた。

「そろそろ帰ろうか。外は嵐のようになつていてるけれど

「そうだね」

彼女の方が先に席を立ち、おばさんに声をかけて会計を済ませようとした。彼は財布を探り、千円を出そうとしたが、彼女はおばさんと世間話をしながらも彼の動きを制して、意地でも彼に金銭を払わせようとした。彼は素直に彼女に感謝をして一足先に店を出た。

定食屋に滞在している間は、ずっと大雨と強風が吹き荒れていたが、彼が店の外に出たタイミングを見計らつたように強風はぴたりと勢いを弱めた。相変わらず大雨は降つていたものの、嵐の中をびちゃびちゃになりながら帰ることになると思つていた彼にとつて、風が弱まつたことは嬉しいことであつた。しかし、代わりに雷のごろごろという音が上空から響き渡り、今の天気が一過性のものではないということを彼に感じさせた。

彼女が定食屋から出でてくると、雨はさらに強さを増していき、地面に打ちつけた雲が跳ね返つて彼らのズボンの裾を少しづつ濡らしていった。だんだんズボンが濡れていくにつれて、彼は自らの精神が一刻と萎えていくのを感じ取り、今すぐにでも自宅に帰つて、ふかふかの布団で横になりたい欲求に駆られた。このような気分の変化というものは、なんの予兆もなしに彼の精神の中に現れるもので、ひとつひとつ慎重に積み上げていた彼の論理的思考をすべてぐちゃぐちゃに破壊してしまうのであつた。それは、ハリケーンが通過した後に、屋根が吹き飛ばされて、家の土台が無残にも？き出しになつた街の光景に似ている。

——次へづく——

第二十一話 嵐 その11

彼は絶望的な気分に浸り始めていたが、すぐさまそんな感情は新たな不可思議な出来事によつて吹き飛ばされたこととなつた。彼が、彼女から借りていた傘を広げようとしたところ、無機物だつたはずの傘に一本の足が生え、彼の手首を軽く蹴飛ばして地面にきれいに着地した。傘としての役目の放棄したその物体は、ゆらゆらと左右に揺れながら二人の様子をうかがつていた。ある一定時間が経過したところで、やがてそれにも飽きて、彼らが元来た道をけんけんで帰り始めた。彼らは、急いで傘の後を追いかける必要があつたのだが、ここで大きな問題が発生した。雨は刻一刻と激しさを増しているというのに、二人の人間に對して、傘が一本しかないものである。

彼は、傘を借りてここまで來たということもあつて、非常に彼女に声を掛けづらかったのだが、彼女はすぐ手招きをして彼を傘の中へ迎え入れた。傘の直径は、二人の合計の肩幅に比べると断然短かつたので、彼らは身を寄せ合つて、なるべく服が濡れないようにしなければならなかつた。その際、彼らの肩はたびたび触れたり離れたりを繰り返し、彼女はそれに対しても立つたりアクションをすることはなかつたが、彼の方は、内心どきどきしてしまつてすっかり調子がおかしくなつてしまつた。心なしか、顔全体の表面温度が上昇傾向にあり、傘のことを考えなければいけないはずなのに、全神経は、彼女と触れ合う肩にすべてを集中させるように仕向けていた。これではいけないと彼は自分に言い聞かせ、目の前で起こつた超常現象について再び思考し始めた。たつた今、傘がひとりでに動き出し、多数の死者が埋葬されている墓地に向かつて自律的に帰還していく姿を彼は目撃している。これは日常的には起こりえない事象であり、傘がどういった使命を背負つて存在しているのか興味があつた。しかし、彼はそれ以上の論理的思考をすることは不可能であつた。彼女の柔らかい肩の感触を感じて彼の脳のシナプスは急停止してしまつた。今日の彼は一体どうしてしまつたのだろう？ 彼は手持ち無沙汰になつて彼女の様子をうかがつてみたが、彼女はしきりに髪の毛をいじつてはいるも

の、動搖している素振りは見られなかつた。彼は不公平さを感じたが、こればっかりは仕方がないと思い諦めた。彼にとつて致命的であつたのは、彼女が日常的に、髪を触る仕草をほとんどしないということを知らないことであつた。何とか態勢を整えた二人は、ようやく傘の追跡を開始した。

——次へつづく——

第二十二話 嵐 その12

傘は、やはり彼女の家がある寺の方向を目指しているようで、雨が激しく打ちつけるアスファルトの上を、裸足でびちゃびちゃと進んでいた。彼らの目は、視覚的情報として傘の悲愴な後ろ姿を捉えてはいたが、全ての生き物が無条件に放つ生命的な気配というものを、傘から一切感じることができなかつた。そもそも、彼らには得体のしれない何者かが、脳にイメージを植え付けて、その対象だけに傘を可視化できるようにしているのではないかと思われた。それほどに傘の存在感は薄つすらとしか把握できず、その刹那的な雰囲気が余計に二人の興味を惹いていた。

結局、それ以降は何か特別な出来事が発生することもなく、彼らが気づいた時には、再び彼女の家の門の前まで帰つてきていた。相変わらず傘は一団の先頭を率いていて、それは寺の敷地内でも同様であつた。ただ、強いて一つだけ先ほどとの変更点を上げるとするならば、それは、傘が人の住んでいない母屋の方へと向かつていつたことである。この時、彼はひよつとしたら、傘には動物で言うところの帰巣本能のようなものが働いているのではないかと考えていた。そうすると、今まさに傘が帰還しようとしている母屋には、傘とは別の仲間が巣くつているのかもしれないと思われた、彼がこの場所に来てから、まだ数時間しか経つていなかつたが、彼は自分の中に、少しずつ気味の悪い違和感のようなものが一滴ずつ確実に溜まつていくのに気がついていた。それは、パソコンになかに誤つてウイルスソフトをダウンロードしてしまうのと同じである。累積していくにつれて、彼の動作は徐々に鈍くなつていき、最後には、ウイルスが全身を巡つていたことでほとんど身動きが取れなくなつてしまふのである。

彼は、ふと自分の考えがどれほど真実に近づいているのか気になり、彼女の横顔を盗み見た。けれども、彼女の表情からは一切の情報を読み取ることができず、ずっと中立の立場を守り続けていた、さすがに、普段温厚な彼と言えども、ある程度内情は知つてているであろう彼女から、この状況に対する説明が一言もないということに少しづつ

苛立ちを覚えていた。どうして、傘が自律して動いているというのに、顔色一つ変えずに無言を貫くことが可能なのだろうか。もしかしたら、彼女にとつてこういうことは日常茶飯事であり、特段驚くようなことではないのかもしれない。もしかしたら、彼女は他の仲間の頭数に含まれていて、目の前の傘と協力して、彼を母屋へと誘おうとしているのかもしれない。そうなった場合、彼は良くも悪くも手厚い歓迎をされるに違いない。まあいずれにせよ、そう遠くない未来に彼女の口から判決が下されるであろうことは想像に難くなかった。

第二十三話 嵐 その13

彼らは、敷地の右奥に位置し、現在は人が住みつかなくなつて久しい、彼女の家よりも一回り大きな母屋の前へとたどり着いた。玄関は昔ながらの二枚扉で、彼は若き時分の郷愁の念に駆られた。玄関脇の土壁には、蛇行した亀裂が生じていて、何かの拍子に崩壊してしまうのではないかと彼を震え上がらせた。

傘は、扉の前まで来ると、それまで軽快に刻んでいたけんけんのリズムを停止させた。その後ろ姿からは、以前にも同じような状況を何度も習慣的に経験したことがある者が見せる悠然さが発せられていたが、一体、傘をそうさせる根拠がどこにあるのか彼には皆目見当がつかなかつた。もしや、このまま玄関と永遠に睨めっこすることが目的の可能性だつて考えられなくはないのだ。なんたつて、傘が目の前に存在していることの確かな説明をすることはできるのかどうかだつて怪しいのだから。

彼が、そうやつて傘を見つめながら先行きを心配していると、彼女が前へ歩み出で、がらがらと二枚扉を開けてやつた。すると、そこに陣取つていた傘は家中へとびよんびよんと入つていつた。傍から見ていると、その光景は、主人に扉を開けてもらつて一目散に室内へと駆けて行く飼い犬に見えなくもなかつた。

どうぞ、と彼女は言つて先に中へ入つていつた。彼も続いて家の中に足を踏み入れると、敷居の先は土足で入ることができ四人掛けの応接間になつていて、左側と正面はガラス戸で仕切られた和室へと続いていた。右側はタイル張りのダイニングキッチンにつながつていた。彼が見た範囲だけでも和室にはガスストーブやほこりのかぶつた扇風機などが雑然と放置されていて、この家が物置として使用されていることは一目瞭然であつた。

「うん」

そう言うと彼女は、彼を置いてけぼりにして正面の和室へと向かい、突き当りを左へと曲がつて奥の方へ姿を消した。辺りは静寂に包まれたが、彼は初めて訪れた場所ではいつもそうであったが、全ての

視覚情報が新鮮であるために全ての家具をひとつひとつ認知しなければならないので、彼の精神は少しづつ疲弊していった。

そうやって、彼が玄関のところで立ち尽くしていると、どこからか妙な視線を注がれていることに気づいた。しかし、周囲を見回してみたところで視線の主を特定することはできず、彼が気のせいだったのかもしれないと思を抜いた次の瞬間には、彼の隣でまー君が小型ゲーム機にイヤホンを付けて大音量で遊んでいた。驚きやすい質だった彼は、まー君の突然の出現に肝を冷やして、その場に倒れそうになつたが、なんとか踏みどどまり、今の自分が置かれている状況が何となく理解できるようになつてきていた。

——次へつづく——

第二十四話 嵐 その14

彼のたつた四半世紀の短い人生経験によると、こういう事柄においては理性よりも感性の方で感じることが重要で、彼は全てをなるがままに任せることにした。まー君と目が合うと、まー君は右側のダイニングキッチンの方へつながる引き戸をおもむろに指さしたが、その行動の意味するところが彼には理解できなかつた。やがて、彼女が「置いたはずの場所にないんだけど」と、ぶつぶつ言いながら正面の和室から帰つてきた。彼は、彼女がこの状況に対して、どういう反応を示すのかによつて彼女の立ち位置が判明するのかもしれないと考えた。しかし、彼女はまー君がいることに全く驚く素振りを見せず、あろうことか、ピコピコやつていて彼に、絵画つて今どこにあるんだつけ、と饒舌に尋ねる始末だつた。これには、彼も呆れて開いた口がふさがらず、彼女が向こう側陣営に所属している可能性も少なからずあると考察した。それは、人狼と市民の数がほぼ同数の時に、彼女が白人外であると気づいてしまつた村側の気持ちに通ずるところがある。この日本家屋の屋敷には、何か重大な秘密が隠されているのかもしれない。そう考えるだけで、彼の気分は次第に高揚してきて、いくらこの先に見え見えの罠が仕掛けであつたとしても、その罠を軽はずみに踏み抜いていく冒険者としての性が徐々に彼の思考を侵食し始めた。

なぜかは知らないが、彼女よりこの家について物知りなまー君は、自分が役に立てることがうれしいようで、顔には満面の笑みを浮かべていた。「こっちきて」と言い放つと、右前方の閉ざされた引き戸の前まで勢いよく走つていき、いかなる物体をも通せんぼしている引き戸に対して、まー君は「どいて！」と、なかば興奮氣味に大声で言つた。しかし、彼の必死の懇願はその引き戸の所で打ち消され、思うような成果を出すことができなかつた。彼は、その場で赤面して下を向いてしまつた。

それを傍から見ていた彼は、昔の自分のようにどんな出来事に対しても、常に全力で立ち向かっていくゲーム少年の姿を見て、なつかし

い気持ちが込み上げてきた。今でこそ、頭のてっぺんからつま先まで、がつしりと論理武装している彼であつたが、小学校を卒業するまでは、多くの小学生がそうであるように、自分の住んでいる限られたごく一部の地域が世界の全てだと思い込み、その小さな箱庭の中で偶発的に起ころる、ごくごく平凡な出来事に対して、日々全力投球していた。まだ身長が低い時期ということもあって、何を認識するのにも顔は上に向かねばならず、それ故に常に心は上に向かつて背伸びをしていた。また、その心に答えるように、日々目線は高くなつていき、人生経験が浅いために、少なからず表面を取り繕つている大人たちでさえも、全てが格好いいように見えたものだつた。

——次へつづく——

第二十五話 嵐 その15

そんなことを彼が考えていると、目の前で三人に立ちふさがつていた引き戸が、旧家であることを微塵も感じさせない軽妙さでするするとダイニングキッチンへの道を開いたのだった。彼の頭の処理が追付かないでいると、まー君と彼女はダイニングの横から行ける二階への階段を上がつていき、彼はその場にひとり取り残された。次々と起ころる不可解な現象に出会つたことで、頭が痛くなつていて彼であったが、その反面、彼の無意識の領域ではマグマだまりが形成され始めていて、彼の身体はだんだん熱くなり心臓が高鳴つていた。この状態になると、彼は自分の意識が薄れてくるのを感じ、ほぼ全ての意識活動を、彼の内奥に存在している別の行動規範を備えた相棒に譲り渡した。普段、相棒と呼ばれているもう一人の彼というのは、精神医学で言うところの二重人格に分類されるもののように大げさなものでは決してなく、連綿と受け継がれてきた彼の祖先の遺伝子の変異体のひとつに過ぎないのである。彼もまた、たかが百年ほつちの遺伝子の乗り物のひとつであるにすぎず、彼のわずかばかりの脳みそから導き出した答えとしては、意思を持つているのは人間ではなく、遺伝子の方ではないかとということだつた。あくまで、子孫繁栄をしようとしているのは遺伝子の意志であり、人間は使い捨ての動物であるようにしか思えなかつた。遺伝子とは神であり、永遠の命を持つてゐるというわけだ。

彼の剥き出しになつた御魂は、眼前に迫つてゐる危機的状況をその柔らかい身体で受け止め、その結果、激しい心臓の鼓動が襲つてきて、彼はその場に立つてゐることが困難なほどに呼吸が苦しくなつてしまつた。彼はたまらずその場にうずくまり、肺から生成された酸素が少しでも多く脳に供給されるようじつとしていた。

少し呼吸が落ち着いてくると、彼は先ほど自律して行動していた引き戸の方に興味が再燃してきつた。こうして引き戸だけを意識的に観察していると、家族の人間が使わなくなつて久しい家屋や家具に比べると、そこには生命に類似した熱のようなものが感じられるような気

がした。我慢ができなくなつた彼は、無意識に手を引き戸へ伸ばして、それから発せられる熱の正体は一体何なのか突き止めようと試みた。しかし、彼があと少しで触れられるはずだつた引き戸は、彼に触れられることを極度に拒み、この世界の物理法則を無視して、彼から遠ざかるように、徐々に壁の中へとめり込んでいった。ついには、追跡していた彼の手が奥の壁に当たり、目の前から引き戸の存在を確認することができなくなつてしまつた。

——次へつづく——

第二十六話 嵐 その16

彼が驚きを隠せないでいると、階段の壁から、片目だけを出して彼女とまー君が彼の姿を観察していた。彼女は彼と目が合うと、すぐに視線を下にそらし、何か伝えたいことがあるが、それを伝えることが果たして正しいことなのか逡巡する気配を見せた。しばしの熟考ののち、彼女は決意を固め、彼の瞳をみつめると、彼女は躊躇なく彼の方に近づき、そつと彼の手を握った。そして唐突にこう言つた。

「ねえ、お祖父さんに会いたくない？」

「可能であればね」

「不確実ではあるんだけど、もしかしたらあなたのお祖父さんに会うことができるかもしれないのよ」「

「さすがにそれは無理だろう」

「そう。これなら信じてくれる？」と言つて、彼女はゆっくりと彼の身体を、自分に引き寄せようとした。だんだんと二人の顔の距離は近づいていき、彼はかなり照れくさい気持ちになつた。しかし、彼女は相変わらず無表情で、彼に対して特別な感情を持ち合わせていないことは明々白々であつた。お互の息遣いが感じられるほどに顔と顔が近づいているのにもかかわらず、彼女の表情からは、これから起きるであろう接触に対する感情の高まりを読み取ることが一切できず、彼は困惑するしかなかつた。やがて、お互の鼻が触れ合うと、彼女は自然と瞳を閉じてしまい、彼の心臓は生まれてから一番の活動を見せようとしていた。しかし、彼はこういったことに不慣れであつたため、接触の雰囲気を味わうために目を閉じることはなく、目の前で揺れている彼女のきれいなまつげを眺め続けていた。そうすると次の瞬間、彼女の閉じられた瞳から、一筋の涙がこぼれてきて彼を狼狽させることになつた。あまりにも突然の出来事であつたために、彼はこの数秒の間に起きた彼女の心情の変化を理解することができず、彼は精一杯の心遣いとして優しく彼女の肩に手を添えてやることしかできなかつた。しかし、彼の努力も虚しく、彼の両手は彼女の肩に触れることなく空を切つた。そのまま彼は前のめりにバランスを崩して、

彼女の半透明になつた全身を貫通した。彼は後ろにいたまー君と目が合つたが、まー君は彼に何かを言いかけて、あきらめたように悲しい顔で首を横に振つた。

「ごめん、よく事態が把握できていなんだけど」

「まあ、何となくは理解できた?」と彼女は、彼に背を向けたまま言った。

「まあね」

「もう一度聞くけど、あなたのお祖父さんに会つてみたいと思わない?」

「本当に会えるのであれば、会いたいけど」

「よし、そしたらもう一度湖に戻ろう」

——次へつづく——

第二十七話 嵐 その17

そう言つて、彼女は絵画の話しなんかなかつたことにして玄関の方へ姿を消していった。彼が少年に視線を送ると、少年はすぐに目線をそらして彼女の後を追いかけていった。

ひとりリビングに取り残された青年は、これから起きるであろう未だ出来のことを推測しようとしたが、今日の出来事の多くを推測できなかつたのと同じように、これから起きるであろう未来のことを考えるのは、あまり得策でないと思い諦めた。しかし、彼の思考は、どうにかしてこの非合理的な状況から逃避しようとして、また新たな思考の種を探すべく脳内の引き出しをでたらめに開閉し始めた。

普段なら、彼はこういう自分の傾向的性格と同調するのが常であったが、このときばかりは違う反応を見せた。人間として、二十年ほど生きていると、人生経験から物事が半ばまで過ぎている場合には、いくら己の好奇心の源からこれ以上のモチベーションを取り出すのが困難な場合でも、そういう目標の達成が、未来の自分のために有益であることが多いということを確信していたので、彼は、事ここに至つては、自らの思考の現実逃避を許すことができなかつた。それは、自分の幸せのために、学校や会社から逃げることは構わないが、どこまで行つても、自分という存在からは逃げられないのと同じである。

彼は、今すぐにでもこの場所から逃げ出したいという弱気な気持ちを抑え、腹を決めて湖へ向かうことにした。

彼は、ついぞ拝見することのできなかつた絵画たちのことを思い出した。元はと言えば、収集された絵画を鑑賞しにこの家に来たのだった。一体どんな作品がここには収められていたのだろう。彼はまだ絵のことが名残惜しかつた。しかし、今はそんなことを考えている場合ではない。なんたつて、祖父に再会できるなんてあの娘は言つていいのだ。きっと絵画鑑賞より面白いことが起きるに違ひないと彼は思つた。

彼が玄関から外へ出ると、すでに雨は止んでおり、その代わりに、雨

雲の合間から雷の不機嫌そうな轟音が絶え間なく大地へと降り注いでいた。時おり、雲の上で癪癩を起した雷が、爆音とともになって地上に落下してくることがあつたが、それもほんの少しのことで、あとはそんなこともなかつたために、辺りには、昼間にもかかわらず、薄暗く不穏な雰囲気が漂つていた。彼が、湖への階段の下のところまで来たとき、二人は階段を登り切つた辺りの所で、もうすでに後姿が木々の中へと消えようとしていたが、彼女はいつたん立ち止まり、後ろを振り返つた。彼がしつかり自分たちの後をついてきてることを確認すると、そのまま茂みの中へ姿を消した。彼も湖へと続く石段を登り、午前中に初めて彼女と出会つた湖に、何時間かぶりに舞い戻つた。

——次へつづく——

第五章

第二十八話 再会 その1

「いいか、三人が湖の前で揃つたところで、小娘がこちらに向かつて合図をしてくるから、そのタイミングに合わせてお前らがどかんと一発、湖に雷をぶち込むんだ。その光にまぎれて俺は下にいる三人の前に現れるからな。いいか、あの小僧の爺さんのためにも、ここはひとつ派手にやつてやろうじゃないか。あの爺さん、いつもなら天狗にすすめられた酒を飲むことはめつたにないのに、今日は珍しく大好きな日本酒を浴びるほど飲んでいるからな。それほど、孫に会えるのが嬉しいんだろうな。

心配することはないさ、今日のお前らの調子だと、嵐を巻き起こすことにもさして苦労をしていないようだからな。今さらお前ら義兄弟の能力を疑うやつは他にいないさ。もしいたら、そんな奴は俺の二十メートルの尻尾で吹き飛ばしてやるから安心しろ」

「だつてさ」

「うん、きつと大丈夫だよ」

「だといいけどな。まあお前がくそみたいな醜態をさらさなければ問題はないが」

「頑張るよ、兄ちゃん」

そう軽口を叩いていた義兄弟であつたが、風神と雷神の生まれ変わりである彼ら義兄弟にとつて、立派な雷を落とせるようになつたのは、つい最近、数百年の出来事であり、彼らの親世代が片割れだけで巨大な雷を生成できたことに比べると、彼らは八百万の神としてはまだ未成熟であつた。しかし、義兄弟で嵐を巻き起こせるようになつた時点では、たとえ片田舎であつたにしても、一地方の天候を担当しなければならないのが風神、雷神の代々の伝統であつたので、彼らもしぶしぶそれらに従つていた。もちろん、いざとなれば、目の前にいる全長数百メートルの白い龍が嵐を巻き起こすことも可能だし、白の宴会場で、青年の祖父に酒をすすめている泥酔天狗でさえも、团扇

の一振りで嵐を巻き起こすことができるのであったから、彼ら義兄弟は何の心配もする必要はないのであつた。

9

彼が石段を登りきると、彼女の足元にいた、二つの尾を持つ猫又は、尾をひとつにくるくると結びなおし、昼間にも陣取っていた木上の特等席に座つてこちらを観察していた。一人は彼の到着を待ちわびていた。

何層にも積み重なつた曇天が、暗度の増した湖の上空に覆いかぶさり、辺りの木陰におどろおどろしい雰囲気を醸し出していた。今や雷の爆裂音だけが彼らの耳に届く唯一の音響であり、その威圧的な旋律おそらく何者かによつて意識的に三人の聴衆に向けて発せられて、いるように彼らには感じられた。やがて、彼女が上空に向けて指揮者のよう四拍子のリズムを刻むと、みるとうちに幾重にもかなつた雲軍が円を描くように回りだし、本格的に雷の重低音がオーケストラのように演奏を始めた。

——次へつづく——

第二十九話 再会 その2

湖に効果的に引き寄せられた雷鳴は、辺りにぐるつと聳えている木々に跳ね返つて、何重もの深みを備えて湖の畔にいる観客の好奇心をほしいままにした。しかし、そんな協奏曲でさえも、まだ序章を奏でているにすぎず、この後に待ち受けるクライマックスに向けて、それぞのパートが少しづつピッチを上げている段階であつた。やがて、一瞬オーケストラの音が消失したかと思うと、一呼吸ためた後に、巨大なイカズチが何重奏もの響きをともなつて、最大音量で、一発どかんと水面に音速で衝突した。辺りには、衝撃波とともに焦げ臭い煙が充満して、三人の視界は完全に視認できなくなり、彼らが次に目を開けた時には、湖とほぼ同等の全長を誇る、角がオレンジ色の白き竜が姿を現した。

彼は、竜の大きさに初めてのうちは圧倒されていたが、竜の彼を見つめる巨大な瞳には、我が子を見つめているような愛情とやさしさがこもつており、少なからず彼を困惑させた。なぜなら、彼は目の前の竜に会つたことがないのである。しかし、なぜかわからないが、彼の両手には竜の角の感覚がありありと蘇ってきて、それは彼が過去に竜の角に触れたことがあるという動かぬ証拠であつた。

「はやく俺に乗れ、上で皆がお前を待つていて」、彼女の先導で竜の頭まで登つっていくと、彼らはしっかりと白竜の角につかまつた。やがて、竜はゆっくりと天空へと昇つて行つたが、その時の不思議な感覚は、彼にとつては懐かしさを感じるものであつた。

彼は、生まれて初めて雲の上に降り立つたが、雲の感触はイメージしていたふわふわとしたものではなく、地上とほぼ同じような感覚であつた。

「ここは特別な場所だ。他の雲に乘ろうとするならば、八百万の神でもない限り、たちまち装備なしのスカイダイビングになる」、彼の頭上から竜の声が脳内に直接響いてきた。どうやら、竜の前では私的な思考は全部筒抜けになつていて、竜は続けてこう言つた。

「本来、生者はここに立ち入ることは不可能であるが、お前はここに来

る条件を満たしている稀有な存在だから、特別に連れて来てやつた。もちろん、その条件というものは決して生易しいものではなく、だがしかし、それほど険しい条件だからこそ、それを備えた者たちは、人類史の節目で英雄と呼ばれ、史に名を刻んできた。また、それを備えたにも関わらず、あまりにも人間的な些事な欲望に敗北して、身を滅ぼしてきた選ばれしものも何人と見てきた。重要なことは、自分のために生きることではなく、人類のために奉仕しようとする高邁な気持ちが重要だ。まあ、今のお前に、これを伝えたところで、俺が何を言っているのか理解することはできないに違いない。とにかく、この領域にたどり着けただけでも驚くべきことだ。あくまで始まりにすぎないが、もしかすると、これは偉大な始まりになるのかもしれないな」「なるほど」と、彼は相槌を打つたが、その役割はあまりにも荷が重すぎるようと思われた。

——次へづづく——

第三十話 再会 その3

二人は彼のことを見ていたが、彼が竜と長話しをしていたので、待ちきれなくなつたまー君はおもむろに彼の手を取り、いこうよ、と言つて強引に彼を引きずり、敷地内の唯一の建造物である、白の宴会場へと三人は足を踏み入れた。

中では、多くの白装束を着ている人たちが宴会をやつしていく、それに混じつて天狗と風神・雷神の義兄弟が、ひとりの老人と酒を交わしていた。彼は会場内の光景を目の当たりにして少し戸惑っていたが、彼の姿を捉えた赤ら顔の天狗が、にやにやしながら近づいてきて、なれなれしく彼と肩を組むと、さあ、こつちへ来なさい、と言つて彼を宴会の中へと連れて行つた。

彼が連れていかれた先には、七年前にがんで死んでいたはずの祖父が座つていて、生前のようにならぬ姿で彼を迎えてくれた。

「一人ともよく来てくれた。亞里ちゃん、日頃からお墓のお世話をしてくれてありがとう」

「いえいえ、とんでもないです」

「こつちはこの通り、一見楽しそうにやつているように見えるが、どう見積もりをしてみたところで、生前の方が何十倍も楽しかったと断言できるのう。もちろん、こちら側の者には、全ての生きとし生ける者が患つてゐる「他人より優れたい病」を発症している者がいないという利点はあるが、逆に、それを克服してしまうと、人間らしさがなくなつてしまふから、それも面白みに欠けるというところもあるのだがな。結局のところ、人間というものは己の安全を確保してからでないと、他人のために行動しようとするのが原則原理なのだろうな。そんなことより」と老人はそこで話し続けるのをやめて、孫の顔を見つめた。どうやら、この老人には雰囲気からほとんど孫の感情がまるわかりであるようだつた。

「お前、何か言いたいことがあるのか」

「うん」

「どうした

「まだ周りの人にはほとんど言つてないんだけど、ゆくゆくは物書きとして生計を立てていきたいと思つていいんだ」

「それは、小説家になりたいということか」

「そう

「なるほどな。それはまた面白い道を選んだものだ。まあ、将来のことについては、己の後悔がないように選択するのが吉というものだ。その類の話をしたいのであれば、酒を飲みながらゆつくりと聞かせてもらおう。照れ屋なお前にはアルコールの力に頼つた方が何かと便利なこともあろう

「そうだね。麦酒で乾杯といきますか」

老人は、孫のグラスに並々と麦酒を注いで乾杯をした。正面の小舞台では、天狗がウオツカの小瓶をつぎつぎと一気飲みし、飲み干した瓶を足元にいくつも並べていた。やがて、それらをボウリングのピンに見立てて、どこから持ってきたのか判明としないボウリングの玉を、空っぽの瓶めがけて試投し、「ストライク！」と大声で叫んどうひやうひやとひとりで盛り上がっていた。やがて、それにも飽くと、千鳥足で二人の間にふらふらと割つて入り込み、普段から常飲している、お気に入りの焼酎を彼のグラスが空くたびに間断なく注ぎ込む嫌がらせを始めた。アルコールにまったく耐性がない彼にとつては、拷問のように過酷ではあつたものの、天狗から注がれた酒を残すといふことは失礼に当たるようと思われたので、覚悟を決めてその全てを飲み干した。しかし、多くの若者がそうであるように、彼には酒の耐性が全くなかつたために、次第に視界がゆつくりと回転を始め、とうとう三半規管はすっかり酒に狂わされてしまった。最初のうち、彼は非常に気分が良かつたのだが、だんだんと目を開けていることが億劫になり、上機嫌に話しかけてくる天狗の話に相槌は打つているものの、酒に脳を支配された彼には、その内容を理解することはもはや不可能であつた。

——次へづづく——

第三十一話 再会 その4

天狗は、彼が酩酊していることに気がつくと、一瞬、悲しい気持ちに襲われたが、すぐさま気持ちを取り直し、ほとんど意味のない支離滅裂な話しをして、彼をからかうこととした。それらは、今日の天気が嵐であることや、今朝、新聞である経営者がレバノンに逃走した話など多岐にわたった。彼はその意味のない会話に対しても、毎回丁寧に賛同と驚嘆の相槌を打ち続け、顔は真っ赤になつて、赤べこのよう上下来首を動かしていた。そして、全身に危険な量のアルコールをため込んだ彼の思考はショートし、全身の筋肉に力が入らなくなつて、糸の切れた人形のようにその場に背中を丸めて寝込んでしまつた。彼の祖父は孫が心配で仕方がなかつたが、天狗にとつては、飲み相手がいなくなつたのがつまらなかつたようで、彼女をテーブルに呼んで、また昔話しを始めた。犠牲者が目の前にいただけに、彼女は苦笑いをするしかなかつた。まー君は、青年の祖父とオレンジジュースで乾杯していた。

10

目を覚ました時、あたりは真つ暗で、彼は一瞬、自分がどこにいるのか理解することができなかつた。今明らかなことと言えば、彼が横たわつてゐるのが、見知らぬベットの上であるということだけで、その布団からは彼の知らない石鹼と汗の匂いが混じつたような匂いがしていた。しかし、すぐさま激しい頭痛が彼を襲い、宴会での出来事を思い出させた。どうやら、あれは現実に起きた出来事のようで、その証拠に、頭上のひもを引いて電気をつけると、彼女が足元の小さい白い絨毯の上で、タオルケットを敷いて大の字で寝ていた。室内が明るくなると、彼女は背中を縮めてだんごむしになつたが、しばらくすると再び寝息を立て始めた。

彼は分解できなかつたアルコールを嘔吐したい気分だつたので、彼女を搖さぶつてトイレの場所を訪ねた。彼女は目をこすりながら、廊

下に出てすぐ右、と答えた。廊下に出ると、視界がグワングワンと揺れて、吐き気が徐々に高まつていくのを感じて、このまま行くと、便器にあごを乗せた段階ですぐに楽になれると思つて安心した。しかし、彼がトイレまであとわずかというところまで来ると、後ろからまー君がものすごい勢いで走つてきて、彼より先に便所に入つていつた。彼は絶望感に襲われながらその場に座り込んでしまつた。さつきと吐けば少し気分もよくなるのだが、もし、限界が来てしまつたら、床に嘔吐物をまき散らすことになるに違ひないと諦めてしまつた。今更になつて、まー君がなぜこんなところにいるのか気になつたが、その次の思考をするだけの元気が今の彼にはなかつた。

——次へつづく——

第三十二話 再会 その5

まー君が用を済まして便所から出でてくると、彼が床に頭からいもむしのように崩れ落ちていた。トイレが空いたのを見計らつて、廊下にオーム型に崩れ落ちていた物体は、のそのそと中へ入つていき、胃の中のものを全て便器にぶちまけた。嘔吐中は最悪の気分だったが、それが終わると彼の調子は快方に向かつていった。さつき食べたうどんが消化されずに便器に浮いていたが、その光景から悪寒しか催されなかつた彼はすぐに気持ち悪くなつてトイレの水を流した。他人の家に迷惑をかける事態は避けられたが、脱水気味になつた彼は、その場から立ち上がることができなくなつてしまい、わずかでも水分を摂取する目的で、便器の中の水を手ですくいとり、背徳感に浸りながらその水を口の中に注ぎ込んだ。便所の壁にはチョモランマのポスターが貼つてあり、彼は薄れゆく意識の最中で、どうしてその山が選ばれたのだろうかとずつと疑問に思つていた。

しばらくすると、小康状態になり起き上がりれるようになつた。彼が少しそつきりして部屋に戻ると、彼女はすでに目を覚ましていて、自身のベットに腰かけて彼が帰つてくるのを待ち構えていた。

「酔いつぶれた君を、天狗がここまで運んでくれたのよ」

「そうだつたのか。やっぱりあれは夢じやなかつたみたいだね。といふことは、僕は祖父にとんでもないことを宣言してしまつたかもしけないな」

「そんなことはないわ。来るべき時がやつてきたというだけのことで、あなたはただ自分が楽しむことだけを考えればいいの」「それが正しい選択なのか今はわからないけど」

「あなたはもう帰つたほうがいいわ。ここは、生者がいつまでもいていい場所じやないの。ここに慣れてしまうと後々大変になる」

「君は？」

「わたしはここで生まれ育つたから大丈夫だけど、普通の人々にとつて、ここはあまりにも非日常的すぎるから、長く滞在することは勧められないわ」

「祖父に再会できたことで、今の自分のやるべきことがはつきりした気がする。まずは、家に帰つて、今日の出来事を小説にすることから始めてみるよ。それで、色々な物事が明瞭になつていくような感じがしているし」

「再会できたのは、あなたの祖父だけじゃないわ」

「どういうこと?」

「何も覚えていないのね。今日、出会つた人ならざる者たちは、全員あなたがここに来るのを楽しみに待つていたのよ」

「全員? それはさすがに冗談だろう」

「それじゃあ、これからわたしがひとつずつ丁寧にあなたとあなたの仲間の物語を語つてあげるから、一言一句聞き逃さないように。あ、でもその前に」と彼女は言いながら、彼を引き寄せて激しく接吻した。彼にはそれを拒む気力がもはや残つておらず、されるがままにベットへ押し倒された。彼が、彼女のキヤミソールを脱がそうとすると、汗でベトベトになつて肩に引っ掛かり、うまく脱がすことができなかつた。しかし、それは彼の身体も同様のことで、全身にまとわりついでいる汗が不快感を増加させ、さらに疲労と眠気と性欲と二日酔いが絶妙に混ざり合つて、彼らの良識ある理性の制御装置はいつの間にか外されていた。堰を切つたように、二人の男女は獸欲のままに貪りあい、やがてベットの上で互いに不足していた凹凸を満たしあつて、溶けるようにひとつとなつた。

空の上では、彼の祖父と白竜と天狗と風神・雷神がその他多くの死者と宴会をしていて、まー君は彼女の妹とテレビゲームに熱中していた。

彼女との接吻は日本酒の芳香がしたものだった。

—FIN—